

「奥さん、たいへん。ちよつと降りてきて」

パートタイムの安田やすださんが階段の下で叫ん

でいる。結子ゆうこは事務所の窓から顔を出した。

「どうしたのよ、誰か怪我でもしたの？」

「社長と磐田いわた部長が取っ組み合い始めたんや」
「なんですって」

磐田いわた部長は、得意先、森山もりやましやうじ商事の製造本部

長である。結子ゆうこは急いで階段を駆け下りた。
駐車場を走り抜けて、息を切らせながら工場
へ向かう。

「床頭台しょうとうだいの出来が悪いのなんのつて部長が言
うもんだから、社長かつとなつて」

安田やすださんは後を追いながら言う。結子ゆうこは工
場のドアに手をかけた。開かない。どうした
のだろう。

「安田やすださん、鍵かけた？」

「かけるわけ、ないやろ」

工場の中から罵声が聞こえる。なにかがぶ
つかる音がする。

開かない。戸が開かない。どうしよう。

結子ゆうこは絞るような声を上げた。

「あなたー」

京から香川へ嫁いできた。春樹はるきと知り合い、東
 結子ゆうこは学生時代に夫の春樹はるきと知り合い、東
 来な日常を考えた。娘を引き止めることは出
 な日か、背中、娘を貼りついているよう
 結子ゆうこは後悔していた。
 させてあげなかつた。送はり届りけたその日から、
 ように引いて、ほつたもからでもないのに、肌はの赤
 みが引いて、ほつたもからでもないのに、肌はの赤
 あれから一週間経つていないのに、肌はの赤
 を、つい先日夫の春樹はるきと車で送つていった。
 昨年の暮れである。一カ月検診を終えたのは、
 大阪に嫁いだ娘が里帰りしてきたわ。
 息遣いまで聞こえてきそうだ。
 赤坊が精いたっぱいは、母の胸に抱かされた
 う添付された写真には、親の抱かされた
 へおあさん、おはよう。写メを見て。じよ
 長女の楓かえでからメールが届いていた。
 発光体がまるで蛍のよう。伸ばしたとき、
 先が見ると、ボタンの点滅している。薄黄色の
 両方の腕を触れた。ぐつと伸ばしたとき、指
 が収まつてきた。上ぐつと伸ばしたとき、指
 深い呼吸を繰り返すうち、心臓のどきどき
 ぐつと汗をかいた。夢で。
 自分おれの声で結子ゆうこは目を覚ました。

木工場の勤務時間は朝八時から夕方五時ま
 でと決まっています。朝八時から夕方五時ま
 戻ることにはほとんどない。従業員はたつた六
 人なので、翌日の仕事の段取りや事務などは、
 どうしても後回しになる。
 結子は工場の二階にある事務所の窓から
 自宅を眺めながら、つくづく思う。
 近いのに、遠いわ。
 家は向かいでも、洗濯物を夜露に濡らして
 しましよ、閉店間際のスパイに駆け込むこ
 とも、しよ、ちゅうだ。
 娘の楓は、母親の日常を見て育った。
 「おかさん、帰るから送ってくれる？
 早く夫にこの子を見せたいの」
 そう言つて、首の据わらない子をチャイル
 ドシートにそつと寝かせて帰っていったのだ
 結子は赤ん坊の写真を携帯の中にあるアル
 バムに保存した。携帯を閉じようとして、も
 う一通メールが来た。気がついた。
 息子の「かずき」からだった。
 へ、バイト先、魚売り場に決まり。最悪～
 最悪つてどういうことか。結子はため息をついた。
 それにしても：：。結子はため息をついた。
 息子の文面は、どうしてこんな味気ない
 のだろ。文字写真添付して、まじ、まじ、
 無い。絵文字も顔文字も無い。
 「お、送信されたのは夜中の一時。真夜中
 だ。」「送信されたのは夜中の一時。真夜中
 年一樹は名古屋の私立大学に通っている。来
 ずいぶん前にメールが来ていたのを思い

出す。受信したメールをたぐってみると、あつた。アパートの近くにショップが開店した。バイトを募集している。北欧家具の店で働きたい。北欧と言われてもムーミンぐらいしか結子には浮かんでこない。すると、見越したかのようには追記と称して、もう一通届いた。ア知らないとは思けど、カールハンセンやアルテックの家具（もちろん本物）を置いてあるんだ。就職のことを考えなければいけない時期に、アルバイトに精を出すのもどうかと思う。結子は腹が立った。北欧もいいけど、就職はどうなったの？（それきりメールは途絶えていたのだった。魚売り場に決まり。最悪）というメールを見る限り、就職はまだか。果たして卒業できるのだろうか。単位は取れるのだろうか。卒論は書いているのだろうか。結子は夕べの食卓を思い返す。門前の小僧じゃないけれど、一樹のやつ、いつもの間に覚えたのだろう。おでんの鍋から餛飩色の大根を取りながら春樹が言った。「なにを？」

結子は、こんにやくに辛子をつけながら訊ねた。「インパクトの使い方は？」

「ああ、インパクトの使い方は？」

「電動ねじまわしのことね」

電動か、そういう呼び方もあったか。春樹は
 あきれたような顔をして言った。「インパクトも
 うまく使えていた。下手なやつはネジ山をつぶ
 すからな」
 木片と木片をつぐとき、両方の材に小さな
 穴をあけて接着剤を流し込み、ダボと呼ばれ
 る細い棒をはめ込む。その作業を、正月に帰
 省した一樹に手伝わせた。
 「並の体力があれば木工なんて誰にでもでき
 る。でもな、伸びるか伸びないか、それではセ
 ンスの問題だ。肝心のは、そこだ」
 ふれないうぐダボを打ち込んだり、接着剤があ
 スが必要だ、と春樹は言いたいのだ。
 「小さいころから工場の隅でトントンカチカ
 チやっていたものね」
 相槌を打つと、春樹はビールを飲み干しな
 がら言った。「一樹も来年、卒業か」
 嫁いできたとき、義父は、ろくろを回して
 木製の土産物やおもちゃを作って隣の土産
 物屋に卸していた。おもしろく、安くて色
 鮮やかなプラステック製のおもちゃが回る
 と、木製は見向きもされなくなつた。が、回
 行き詰った工場を建て直すために、春樹と
 結子は何度も話し合った。いつそ勤めに出る
 ほうが、何度か話した。口には出せなかつた。
 る夫の情熱を考えると口には出せなかつた。

「結子、無垢の木を使って家具を作ったらどう
 だろう。年数が経っても飽きが来ないし、だ
 んだん愛着がわいてくると思わんだ。」
 「いいわね。使い込んで色になつたテーブル
 や椅子、私も好きだな。」
 夫の意見に結子も賛成した。そして春樹に
 賛同する仲間がひとり、ふたりと増えていつ
 た。
 銀行に相談して木工機械を購入したり、材
 料の仕入れや得意先とのやりとりなど、結子
 の仕事も煩雑となつた。お金のやりくりで頭
 を悩ますことも多かつた。田舎に帰つて来
 ることもない。都会でサラリーマンになつて来
 る道にもない。くれたらいい。私だつて、毎日か
 ら十六だもの。数字とらめっこする毎日か
 ら早く卒業したい。数字とらめっこする毎日か
 結子は薄暗い天井を見つめた。
 窓の外で踏切の警報機が鳴っている。
 高松行きの一、番電車が乾いた音を立てて
 通り過ぎてゆく。
 結子は、机の上に置いたメモを思い返した。
 タイムカードの計算、伝票の整理、請求書
 の郵送、熊野機械さんに修理の依頼、項目は
 まだあつたはず：
 隣のベッドでは、春樹が頭からすっぽりと
 布団をかぶっている。
 結子は覚悟を決めてベッドから出た。急い
 で着替えて、台所のドアを後ろ手で閉め、石
 降りをした。台所のドアを後ろ手で閉め、石

トープにマッチで火をつけた。

2

「おはよう。とうとう二月に入ったなあ」

夫の春樹が新聞を広げながら言った。スト

ーブの上で、ホウロウのやかんがしゅんしゅ

ん音を立っている。年のことだけど憂鬱だわ、年

度末が近くなる。と「地獄やな」

「ほんとうにな。地獄やな」

結子は茹で卵の殻をむきながら、「地獄」と

いう言葉に眉をひそめた。このように夜食を作っ

たのを思い出して言った。のやうに夜食を作っ

「去年もたいへんだったよね。安田さんなん

て家に帰るのも邪魔くさいから、このまま工

場で泊まるのかしらって言ったこともあった

「わーそうだったなあ」

「新聞から春樹は顔を上げた。」

いと年度末は受注がぐつと増えるから覚悟しな

い「春樹は自分に言い聞かせるように言った。」

「ほんね。やこしいデザインや塗装の仕

事が急に入っくるものね」

「に段取りを組まないと徹夜なんかないよう

「今年は大丈夫かしら」

結子の胸に明け方見た夢がよぎる。心配そ

うに尋ねると、春樹はコーヒーを飲みながら

答えた。

「床頭台のことか？ 作る前から心配してもしようがないじゃないか」

得意先に勧められて、工場ではこの春から床頭台しょうとうだいを作ることになった。

床頭台しょうとうだいは、病院のベッドのそばに置いて使う引き出しや戸棚のついた台のことである。医師や看護師が治療や看護をするときには患者の台として使うけれど、普段よく使うのは患者の身の回りのものを置く。鍵のかかる引き出しに貴重品を入れる。台の真ん中あたりには置かれていてテレビを退屈のぎに見る。台下方に設置された冷蔵庫に、朝食に出た牛乳や果物など食べきれなかったものを入れておいて好きな時間に食べる。患者にとってはお茶の間の家具のようらしい。患者にとつて無垢むくの木でテーブルや椅子を作っていた

くすのき木工所が床頭台しょうとうだいを作るようになったのは、海外から値段の安い木製家具がどんどん輸入されるようになったからである。

売れ行きうりゆきが落ちて春樹はるきと結子ゆうこが頭を抱えていたところに、森山商事もりやましょうじは助け舟を出してくれたのだった。

義父ぎふの代から考えると、二度目の転機を迎えたことになる。| | うまく行くだろうか。

「市立病院向け床頭台しょうとうだい三百セット」の注文書がファックスで届いたその日、結子ゆうこの頭に

床頭台の三文字が刻まれた。

「今日も降水確率ゼロだった。天気予報で言

つていたわ。よかったね」

「結子はっると殻のむけた卵を春樹に勧

めながら言った。晴れ続きで材料が

乾燥しすぎの、よ良かった。雨が続

たら塗装の乾きが悪いから」

「結子はうなずいてコーヒを一口飲んだ。

「トラックに積むときも降ろすときも気を使

のね」濡らしたらクレームの対象になるも

トーストにバターを塗りながら春樹が言う。

「熊野機械さんに朝一番に電話しといてくれ

る？ ステッチャーの調子が悪いんだ」

「ステッチャーは段ボールケースを組み立

てるとき使う、大きなホッチキスみたいな機

械である。機械の上のほうに針金がセツトし

てあって、足ペダルを踏むと針金が短く

切断されて、段ボールを止める仕掛けになっ

ている。」

「そうだったわね、昨日安田さんから聞いて

メモしてあるわ。で、どんな故障なの？」

「ペダルを踏むと、針金がプツプツ切れてし

まうんだ、前にも同じところ

「あ、命かもしないわ」

「確かに古くなっただけ、僕が家具を作るよう

になつたときに、熊野機械が中古の壊れかけ

に手を入れて売ってくれたんだから」

春樹は顔を上げて続けた。

「おやつさんなら直すだろう」

へおやつさん〜とは、熊野機械の社長である。熊野さんは中学を卒業してすぐ機械工場に働きはじめた。現役で機械の修理に専念している。七十歳過ぎても現役で機械の修理に専念している。春樹のような零細の木工所の経営者や、大勢の従業員をかかえる中堅企業の社長から、親しみやすい。こめて「おやつさん」と呼ばれてい

結子も彼に何度か会ったことがある。

字の眉は腰の低い優しいおじさんというイメージだ。が、機械油で手を汚しながらコンプレックスやモーターなどの調子を目や耳で確かめる。社長さんにお願ひしますって、ちゃんとして名前をとる。前世紀の遺物から直るんだよ。内蔵されてきたら、かえって厄介なんだ。そうなる金も換えるように言われる。そうなる金もかかるし」

新聞をたたんで立ち上がる。春樹

に結子は声をかけた。

「朝早く、楓からメールが来たわ」

結子は携帯を開いて赤ん坊の写真を春樹に見せた。見せつかりしてきたなあ」

春樹は携帯に目を擦り付けるようにして見入っている。

結子はついでのように一樹のことも話した。

「一樹、ショットピングモールの魚売り場でバ

イトするんだって。最悪ってメールに書いてあったわ」

「なんで最悪なんだ？」

「だって、北欧家具のお店で働きたかったら

「北欧家具？ あいつ、やっぱ家具に興味

があるのかなあ。名古屋は都会だから、いい家具置いてあるんだろう」

「そうよ。えーと」

結子は一樹から聞いたブランドの名前を

思い出そうとした。が、浮かんでこない。

「でもな、魚屋で働くのもいいかもしれない」
 考えてみる、と春樹は続ける。

「魚の裁き方をプロに教わるなんて機会、め
 ったにないぞ。すっかり覚えるように言うと
 けよ」

結子は笑いながら頷いた。そしてブルーベ

リージャムをたっぷり乗せたパンをほおぼっ

た。あまっばい香り。口いっぱい広がっ

たとき、ひらめいた。はいっても、真面目に働

いたら就職させてもらえませんか。大
 手のショットピングモールだもの。悪くないわ。

急に気持ちが悪くなって結子は二つ目のパ
 ンに手を伸ばした。

春樹が仕事場へ向かった後、結子は

熊野機械へ電話をかけた。

「もしもし、くすのきです。おはようござい
ます。早い時間に電話して申し訳ありません」
社員はまだ入社してないらしく、電話に
出たのは社長本人だった。
「おはようございます。ステツチャーの件で
すか」
「—なんで知っているのだろう。」

結子^{ゆうこ}はおそるおそる尋ねた。

「ご存知なんですか」

「きのうの夕方、お宅で働いている安田^{やすだ}さん
が寄ってくれたんですよ。調子が悪いから朝
一番に見に来てほしいって」

「まあ：：」
「八時過ぎに、私が伺います」
指名しないでも心得ているようだ。

一口残ったコーヒーを飲み干して結子^{ゆうこ}は
立ち上がった。
ベランダの洗濯機が終了のブザーを鳴ら
かしている。青い空にひとすじ、飛行機雲が浮

3

腕を前から上にあげて大きく背伸びの運動
からはい！
「おち、ろく、さん、し、
ごお、ろく、さん、し、ち、はち、
ごお、ろく、さん、し、ち、はち—」

洗濯物を干し終えて家の向かいにある工
場へいくと、ラジオ体操が始まっていた。
体くすのき木工では毎朝、朝礼の後、ラジオ
体操をする。寝ぼけまなこの工員さんもパソ
コンで図面を引く春樹^{はるき}も、朝の体操で体をほ
ぐす。

毎日工場の中で動き回っているのだから、わざわざと腕を伸ばしたり前屈したり、両脚跳びをして体全体を動かすうちに、さあ仕事だ、という気持ちになつてくる。

結子の姿を見つけて、きんちゃんが会釈した。彼は工員さんの中で一番年が若い。

金井正人という名前だが、工場ではみんな（きんちゃん）と呼んでいる。近くの養護学校に通つていたとき、卒業後就職した。実習のときに引率で来た先生が、床にも熱心な方だった。きんちゃんと一緒に塗つたり座り込んでダボを打つたり接着剤を塗つたりするのだ。先生の情熱にゆり動かされて、雇うことになつたのだ。

お前なあ、そんなに味わって食べなくてもいいんじゃないか。

お昼ご飯を食ふとき、きんちゃんは年配の工員さんに、さうな顔をして、さらによつくりは恥づかし。

トイレから出て手を洗うのも入念である。一本の手拭きを取って洗い流す。一本の本をこすり取り、水で洗い流す。工場の仕事も覚え、人のみはずれていて。

ネジに関する人は、丸皿ネジ、皿木ネジ。

ひつとネジにもいろいろな形がある。そのひとつは、クルクメのトナリなど素材によつて区別される。お昼休み、ネジの種類の材料によってある。お前、過ぎなす。ちやんはネジを並べてある。棚の前、過ぎなす。ちやんはネジを並べてある。安田さんが尋ねても耳に入らないのか、ネ

年「は御の字やな」
 安田さんがニコシながら言う。
 の。わ。直。る。っ。て。聞。い。て。一。安。心。や。
 た。わ。だ。っ。つ。て。こ。の。機。械。は。私。の。体。の。一。部。や。も。
 「壊。し。た。の。か。と。思。っ。て。機。械。は。ゆ。う。べ。は。眠。れ。ん。か。つ。
 に。や。っ。て。き。て。話。に。加。わ。る。ゆ。う。べ。は。眠。れ。ん。か。つ。
 こ。ん。で。い。る。体。操。を。終。え。た。安。田。さ。ん。が。小。走。り。
 熊。野。さ。ん。と。春。樹。が。ス。テ。ッ。チ。ャ。ー。の。横。で。話。し。
 結。子。は。作。業。場。を。覗。き。込。ん。だ。
 チ。ヤ。ー。の。音。が。聞。こ。え。て。こ。な。い。ス。テ。ッ。
 が。組。立。作。業。場。だ。け。が。し。ん。と。し。て。い。る。ス。テ。ッ。
 て。丸。鋸。や。ル。ー。タ。ー。や。パ。ネ。ル。ソ。ー。な。ど。木。工。機。械。
 チ。を。切。っ。て。集。塵。機。の。ス。イ。ッ。チ。が。入。る。そ。し。
 場。へ。入。っ。て。重。い。っ。た。道。具。箱。を。抱。え。て。機。械。の。作。業。
 に。来。て。く。れ。た。よ。う。だ。熊。野。さ。ん。は。体。操。に。は。加。
 の。ロ。ゴ。は。熊。野。機。械。の。車。だ。電。話。を。受。け。て。す。ぐ。
 ン。が。駐。車。場。に。停。ま。る。の。が。見。え。た。双。葉。マ。ー。ク。バ。
 か。し。た。上。体。を。起。こ。し。て。胸。を。そ。ら。し。た。と。き。白。い。バ。
 結。子。は。ラ。ジ。オ。体。操。の。輪。の。中。に。入。っ。て。体。を。動。
 ご。お。ろ。く。二。度。曲。げ。て。正。面。で。胸。そ。ら。し。
 体。を。斜。め。下。に。曲。げ。る。体。操。は。い。そ。ら。し。
 や。わ。ら。か。く。二。度。曲。げ。て。正。面。で。胸。そ。ら。し。
 たり。を。手。に。と。っ。て。眺。め。たり。手。触。り。を。た。し。か。め。

なかなんつ「を熊く
 らな、て毎丁野まの
 ます。健康まのし洗は
 「社がしたなけら、
 長一番や。仕事は、
 もや。仕事は、まら
 言。体事は、だいた
 うとさ。だいた。機
 っえ。丈夫じ。忙し
 てく。夫や。や。し
 だ。さ。つ。け。い。っ
 い。ら。奥がや
 ほ。何とさや
 申し。細。企。業。の。経。営。が。ど。ん。な。に。厳。し。い。も。の。か、
 「。あ。り。が。と。う。ご。ざ。い。ま。し。た。」
 「。結。子。は。頭。を。下。げ。た。
 に、結。子。は。頭。を。下。げ。た。
 トイレの横の手洗い場に向かう熊野さん
 ぐ。に。は。新。品。を。購。入。ら。な。い。か。ら。だ。
 い。に。は。手。に。入。ら。な。い。か。ら。だ。
 の。に。は。新。品。を。購。入。ら。な。い。か。ら。だ。
 を。し。て。機。械。が。動。か。な。く。な。る。と。ど。う。し。よ。う。も。な。う
 こ。と。が。分。か。っ。て、春。樹。は。ほ。っ。と。し。た。よ。う。な。顔
 針。金。を。巻。き。取。る。部。品。を。交。換。す。る。だ。け。で。直。る
 「。あ。わ。て。た。げ。に。す。る。か。ら、い。か。ん。の。や。な。す
 く。あ。わ。て。た。げ。に。す。る。か。ら、い。か。ん。の。や。な。す
 す。か。さ。ず。春。樹。が。言。う。と、安。田。さ。ん。は。首。を。す
 「。性。格。の。問。題。や。な」
 「。性。格。の。問。題。や。な」
 安。田。さ。ん。は。首。を。す。く。め。た。
 安。田。さ。ん。は。首。を。す。く。め。た。
 調。子。で。踏。金。が。詰。ま。っ。て。し。ま。う。か。ら。ト。ン。ト。ン。と。い。う
 調。子。で。踏。金。が。詰。ま。っ。て。し。ま。う。か。ら。ト。ン。ト。ン。と。い。う
 と。つ。だ。け。と。付。け。加。え。る。ト。ン。ト。ン。と。い。う
 と。つ。だ。け。と。付。け。加。え。る。ト。ン。ト。ン。と。い。う
 熊野さんは自信たっぷりに言ったあと、ひ

熊野くまのさんはズボンのポケットから取り出した。ハンカチで手をぬぐい、頭をぺこりと下げた。

工場の二階にある事務所に向かう途中で電話が鳴っているのに結子ゆうこは気づいた。急いで駆け上がり、息を切らしながら受話器を取る。

「おはようございます。くすのきです」

「奥さん、社長は？」

森山もりやま商事の磐田いわた部長だ。

「いつもお世話になってます。今、工場の中でですが」

「発注している市立病院向け床頭台しょうとうだいの件ですけど、仕様が変更になった箇所があるので確認したい。折り返し電話もらえるかな」

はい、という返事を待たずに電話は切れた。
――また、変更だわ。

結子ゆうこはため息をつきながらホワイトボードをながめた。生産予定や納期が、日付ごとにぎっしり書かれてある。市立病院の納期は三週間後だ。ここに来て平気で変更を指示する磐田いわた部長に結子ゆうこは腹が立った。

言い方もあろう、と結子ゆうこは思う。

森山もりやま商事はお得意さまだけれど、何かにつけて横柄な話し方をする磐田いわたが、結子ゆうこは好かなかった。

結子ゆうこは五分もしないうちに作業場へ舞い戻った。
トントントントントントントントントントントント

トントントン トントントン

安田さんが慎重にステッチャーのペダル

を踏んでいる。結子の顔にちらっと目をやり、

笑顔で言う。

「奥さん、調子ええわ」

結子も笑顔でうなずいた。

春樹は駐車場で携帯片手に話しこんでいた。

「えっ、色の変更ですか。材料はすべて手配してしまっただけですが、でも。いや、お客さんの希望と違って、いまさら」

ちらっと結子に目を向け、仏頂面で続ける。

「：：：そうですか。ではもう一度、色板のサンプルを作ります」

携帯を切った春樹はやれやれと座り込んだ。

「磐田部長なの？ 電話の取次ぎに降りてき

たところなのに、携帯にかけてきたのね」

「床頭台の色を変更してくれっていうのさ」

「今頃、そんなこと言ってきた間に合うの？ サンプル作ってオケーもらったのに、なん

で変更しないといけません」

「会社で見るときは違和感なかったら、い

ど、実際に病室に置いてみると、なんだか暗

い。落ち着きが重たい感じがするって言うんだ

に。勝手にねえ」

木は北風に細長い駐車場の隅に植えてある梅の

みは殻をかぶったように硬い。花のつぼ

お昼過ぎに磐田部長が来社すると聞いて

結子はあわてて事務所へ戻った。

床頭台しょうとうだいを作ることに決まって、ちりや埃に
 神経しんけいを使うようになった。髪の毛が落ちない
 ように帽子をかぶり、作業場の床はモップで
 拭く。これも磐田部長の影響だ。

結子ゆうこは窓を開けて掃除機をかけ始めた。

4

磐田部長いわたはかたときも携帯を放さない。

事務所のテーブルで春樹はるきと床頭台しょうとうだいの色味
 について話しているときも右手は図面を指差
 し、左手には携帯を握りしめている。

「はい、磐田いわたです。え、なに、それは困る。
 なんだって、要するに決めたとおりに動いて
 くれないと。いったい何を考えて仕事してい
 るんですか。指示書のおり、お願いします
 よ」
 パチッと切った携帯に向かって「死ね」と
 吐き捨てるように言った。お茶を運んできた
 結子ゆうこは、一瞬体をこわばらせた。

テーブルにはA3の用紙が広げられてい
 た。「再考 市立病院出荷までの管理表」とタ
 イトルがあり、一日刻みに進捗状況を記入す
 るようになっていた。

色、柄、仕様の変更は何度も繰り返された。

再考、ではなく、再再再考ではないか、と結子ゆうこ
 は、肩の辺りで吐息をついた。
 「表に書いてあるように進めていけば、なん
 とかなるんです。作業が遅れたら、その日の
 うちに取り戻すこと。時間が猶予も必要かと
 思いますが悠長なことを言う間はありませ
 ん」
 なにはともあれ、納期は厳守ですよ」

磐田部長のことばに、春樹は壁のカレンダー
 に目をやった。
 それからの三週間は、瞬く間に過ぎていつ
 た。立春が過ぎ、駐車場の隅で梅がつぼみを膨
 らませた。工場では塗料の色の配合が行われ、試し塗
 りを何回も繰り返し、床頭台しょうとうだいに使われる色が
 最終決定した。その色に合わせて引き出しや
 扉に使う取っ手や金具を取り寄せた。このま
 まあたれたかな日が三日ぐらい続いて、このま
 工場の灰色の屋根は白いベールにおおわ
 れ、国道沿いでスリップ事故が相次いだ。安田やすだ
 さんは完全に雪が解けてなくなるまで市営バ
 スで通勤してきた。残業した日は、恐縮して
 いたが、春樹はるきが家まで送り届けていった。
 テレビのローカルニュースで、小豆島のお
 遍路さんが（同行二人どうこうふたり）と書かれた菅笠すががさをか
 ぶって杖を手に歩く姿が放映され、四国は春
 本番を迎えようとしていた。結子ゆうこも厚手のセ
 ーターや毛糸のマフラーを洗って片付けた。
 工場では加工の終わった部材の組み立て
 が始まった。磐田部長は進捗状況をチェック
 するために毎日のように工場へやってきた。
 接着剤が効いていないか、天板が反っていない
 か、塗装にムラがないか、金具はきちんと止
 めてあるか。光にかざすようにして、傷の有
 無を確かめる。光にかざすようにして、傷の有
 扉の閉まり具合にも細心の注意を払った。
 扉を閉じるときに、パターンと音がするのは

兆番ちようばん

の位置が悪いからなんです」

部長は目を光らせて何度もテストを繰り返した。あらを探すかのように思える検品の仕方にも、だいたい慣れた。

「奥さん、駐車場の梅の花が満開や。メジロが花の蜜を吸いに来とるで」

三時の休憩時間に事務所に上がってきた安田さんがこっそり教えてくれた。

白梅はくばいはいつのまに咲きそろったのだろう。

せっかく安田やすださんから教えてもらったけれど、結子ゆうこは机を離れなかった。

納品まで残り三日。工場の一角には、完成した床頭台しょうとうだいが列を組むように並んでいる。出荷を待ただけだ。

出荷が終わったら梅の木の下に椅子を置いて座ろう。春の光を浴びながらメジロが蜜を吸う様子をながめよう。

春樹はるきは額にしわを寄せながら、「再考 市立病院出荷までの管理表」に見入っている。そうだ、二日か三日、思い切って休みを取ろう。日曜日をはさめば仕事の支障も少ないわ。工場の人もみんな疲れているし、ちっとも贅沢なことはない。

「結子ゆうこ：」

たのしい計画に夢中になって、春樹はるきが声をかけたことに結子ゆうこは気づかない。

「結子ゆうこ！」

いらだった声で呼ばれて飛び上がりそう

になった。

「床頭しょうとうだい台の段ボールケース、まだ来てないら

しいぞ。確認してくれないか」

「えっ、ケース：：」

結子ゆうこは指先から冷たくなっていくような感

じがした。金具や電気のこまかな部品にばかり気を取

られて、製品を保護する段ボールケースの発

注をすつかり忘れていたのだ。

うだ。ただごとではない表情で春樹はるきは気づいたよ

「注文忘れ？ それはないだろう」

「あやまって済む問題か。よく考えてみる」

結子ゆうこを無視するように、春樹はるきは自分で注文

書を取った。器を取った。そして硬い表情で受話

すが、なんとか間に合わせてもらえませんか」

太陽が雲のあいだに隠れて、急に薄暗くな

った。祈るような気持ちで電話のゆくえに耳

を傾けていると、事務所のドアが開いた。

「まいど。奥さん、床頭しょうとうだい台の部品付けも大方

できてますね。ぱつと見たところ、完成度が

高いように思います。もう一度検品して、い

つになく磐田いわた部長の声が明るい。

結子ゆうこはみぞおちにぎゅっと痛みを感じた。

春樹はるきは振り返って軽く会釈をしたあと、また

壁に向かって電話を続ける。

「本当に申し訳ありません。なんとか助けて

もらえませんか」

懇願するような春樹はるきの声を聞いて結子ゆうこの額

からあぶら汗が流れた。磐田いわた部長の顔が急に

「どうかした。声こゑをひそめて言う。」「それが：：。実は私わたしがケースを発注するの

を忘れてしまったんです」

頭あたまを下げる結子ゆうこには一瞥いちべつもくれず、部長は春樹はるきに近づき、電話を代わるような身振りをした。

「森山もりやま商事の磐田いわたです。申し訳ないのですが、今日中にケースを仕上げて納品してください。お願いしますよ」

部長は電話を切った。組ぐみみ立て作業場に並べる床頭台しょうとうだいは、縦に二十台、横よこに十列を基本とする。きちんと並べたら、後の仕事しごとがやりやすい。数の把握はくわくもでき

る。だから決して列を乱さないこと。磐田いわた部長が口をすっぱくして言い続けたお

かげで、二百台の床頭台しょうとうだいは運動会で出番を待つ小学生のようように整然と並んでいる。残りの百台は、作業場からみ出て連絡通路れんらくどうろに列を

「奥さん、ケースが来るのは今日の午後やっ

たな。届とどいたら私わたしに任せてな。熊野くまのさんが直ちかいてくれたからステッチャーの調子てうしがすごく

いいんだわ」

沈しずんだ顔かおの結子ゆうこに安田やすださんが笑顔で言う。

磐田部長のゴリ押しでケースは間に合うこと
 になつたが、即日入荷はかなわず、届くのは
 市立病院に床頭台しょうとうだいを出荷する当日となつた。
 残業続きで疲れているのに、安田やすださんは文
 句ひとつ言わず、反対に結子ゆうこをばげましてく
 れる。
 「安田やすださん、ありがとう」
 「なに言うの。この年まで働かせてもらえて、
 喜んでるんよ。さ、体操、体操」
 安田やすださんはおどけたように言い、ラジカセ
 のスイッチを入れた。
 から腕を前からはい！さん、し、
 からお、ろ、く、さん、ち、はち、
 次はお、ろ、く、さん、ち、はち、
 いちは、ろ、く、さん、ち、はち、
 にお、ろ、く、さん、ち、はち、
 へい

たら音楽が急に止まった。そのまま跳び続け
 回しいる。後ろのほうで声がした。周りを見
 のしびり。ラジオ体操やつている場合ではな
 いでしよう。ラジオ体操やつて入荷されたら梱
 包してトラックに積込んで出荷。納期は明日の
 今夜は何時に終わるか分からないというの
 磐田部長だ。

従業員は、それぞれの持ち場へ散っていった。
 ただひとり、きんぞの持ち場へ散っていった。

事務所のドアを乱暴に開けながら夫の春樹は入ってきた。デスクに座って伝票の処理をしていた結子は驚いて立ち上がった。「どうしたの」「ステツチャーが壊れた」「なんですって」

「安田さんがペダルに負荷をかけるからだ」

結子は、夜食を出したとき、安田さんの顔が緊張でこわばっていたことを思い出した。「悪気はないのよ」「そんなことは分かってる」

春樹は荒々しく言い放ち音を立てて椅子に座った。

「熊野さんに修理をお願いしたらどうかしら」
 「今、何時だと思ってるんだ。こんな時間に頼めるか。よく考えてみる」
 「時計を見ると、午後十一時をまわっている。だって他に方法はないわ。いいわよう。このままでは出荷できないわ。いいわよう。私が電話するわ」

結子は受話器を手にとった。

工場の照明は夜中の十二時を過ぎても、あかかと灯っていた。さすがに機械や集塵機かの音はしずまり、シャッターの内側からダボを打つ音や話し声が遠慮がちにもれてくる。駐車で車が停まる音がした。結子は事務所の窓から顔をのぞかせた。出荷を待つ四トントラックの横に停まったのは、熊野機械の

車である。後部座席から工具がぎっしり入った。道具箱を重そうに抱えた。社長の姿が見えなかった。とうにすみません。こんな遅くにお呼

びたてして「結子は階段を駆け下りて頭をさげた。」

「いいんですよ。目が冴えて眠れんのですよ。遅くなりまして。なにか話しながら、ステッチャーのおい

「どあれ、ちよつと見えてみましよう。歩く。」

トントン。トントンは。耳を澄ませてペダルの音をじつと聞く。次は針金の巻きつけてあるボビンを手で逆方向へ回し、針金の巻きをゆるめた。針金が絡まっていないか、調べているようだ。

しかし、異常はない。かばらく腕組を考えていたが、ひらめいたように。道具箱から白い布の端切れを取り出した。ボビンを細くねじって機械油をしみこませ、ボビンをしごくように拭いた。どす黒い油汚れがこそげ落ち、ちいさなボルトが足元に転がった。ボルトの付け根がもげている。

「これやな。」
春樹が声を上げた。熊野さんはズボンの後ろポケットに突っ込んであったノギスを取り出してボルトの直径を測った。直径が五・七ミリのボルト、ありませんか。直径が五・七

春樹は頭をひねった。

「五・七ですか。困ったなあ。ふだんはまず、使わないからなあ。」

熊野さんは独り言のようにつぶやき、二人は黙りとんだ。ダボを打っていたきんちゃんも立

ち上がった。二人が話しているのが耳に入っ
 たのだらう。ネジの棚をめぐらせて走っていく。
 やがて目をきらきらさせながら戻ってきた。
 右手をグーにして高く上げている。そして肩
 で息をしながら、熊野さんの前に右手を差し
 出した。ゆっくり指をほどく。ふっくらした
 手のひらの真ん中に黒く煤けた一本のボルト
 が誇らしそうに乗っていた。
 熊野さんはボルトを受け取り、ノギスをあ
 てる。結子はつばを呑み込んだ。
 「ドンピシャリです。金井君ありがとな」
 熊野さんは高らかに言った。オーと言う声
 とともに拍手がわく。
 「社長、この子は貴重な存在です。ね。どの棚
 にどんなネジが置いてあるのか、ちゃんと把
 握しているじゃないですか」
 磐田部長も寄ってきて言う。春樹もうれし
 そうだ。自販機の缶コーヒを配る結子に、
 熊野さんがささやいた。
 「この際だから、朝まで付き合います。帰っ
 ても気になつて眠れませんか」
 安田さんは出荷のトラックが工場から出て
 行くまで仕事をすると頑固に言い張ったが、
 春樹は聞かなかった。残念そうな表情を浮か
 べながら安田さんは帰宅した。
 トントントントントントントントント
 熊野さんは規則正しくペダルを踏む。

出来る。上がった段ボーリングを台車に載せる。人。組み立て作業場まで運ぶ人。すっぽりとナイロン袋をかぶった床頭台しょうとうだいをケースに入れる人。ケースをガムテープで止める人。平たいパレットにケースを並べる人。パレットをフォークリフトでトラックに乗せる人。ト時計を巻き戻したように、人海戦術のリズムがよみがえった。無言で手を動かし、足も運ぶ。

「オツケイ。お疲れさーん」

「運転手さん、安全運転でお願いします」

定規で測ったように床頭台しょうとうだいは荷台に整然と並んでいる。銀色の翼は、運転手さんが操作する油圧によってゆっくり閉じていく。後部こうぶのあたりが上がる。エンジンが始動し、重々しいエンジン音がアスファルトに響く。ヘツドライトが点灯した。手振るように、四トンのウイングトラックはクラクションをかすかに鳴らした。

「部長、お疲れさまでした。ほんとうにありがとうございます」

春樹はるきは磐田いわた部長に頭を下げた。

「時間はオーバーしたけれど、無事に出荷できてよかった。熊野くまのさん、お世話になりました」

ステッチャーの横ですわりこんでいる熊野くまのさんに磐田いわた部長が声をかけると、

「久しぶりに達成感を味わいましたよ。充実した時間を過ごさせてもらいました」

マラソンの最終ランナーのような熊野さん
 の言葉を聞いて、結子の目がうるんだ。
 仕事の終了が朝方だったため、その日は休
 養日になった。
 結子は妙に目が冴えていたけれど、体の芯
 まで冷え切っていたので風呂に入った。さつ
 と流した後、湯船につかる。皮膚の表面から
 内側へ、ぬくもりがじんわりしみこんでいく。
 はっと気がつく。と右の頬が濡れている。あ
 わてて顔を上げる。首まで湯につかる。あ
 眠ったら、だめ……。
 鼻に湯水が入ってきて、結子は目を開けた。
 顔をぎぶぎぶ洗っただけで風呂呂を出た。
 二階の寝室にあがると、部屋中に朝日があ
 ふれていた。春樹は仕事着のままベッドに倒
 れこむように寝ている。結子はカーテンをそ
 っと引いて横になった。
 いつもなら起きる時間に寝るなんて。
 眠れない眠れないと呪文のように繰り返
 したら、頭の回路がシャットアウトしたらし
 い。結子の体は取りつかれたように眠りの奥
 底に沈んでいった。
 気がつく。と九時を過ぎている。隣のベッド
 に夫の姿は無い。
 結子は起き上がってカーテンを開けた。窓
 のサッシにとまっていた小鳥があわてて飛ん
 でいく。
 事務所の窓が開いている。春樹はデスクに
 向かっているようだ。

床頭台は無事に到着しただろうか。午前十時に荷降ろしが始まる。市立病院では、森山の営業マンが立会いのため、待機しているはずだ。トラックの運転手に業務用の入り口から入るようになり、ちやんと指示してくれただか。付属品が入っている段ボールはどのトラックに積んでありますか。補修用の塗料は何種類用意してくれましたか。

磐田部長の電話の声が聞こえるような気がした。

結子はおおきく伸びをした。ついでに、両方の腕を大きく振った。肩をぐるぐる回す。肩甲骨をぎゅゅと締めながら、今朝もラジオ体操を休んだのは、たった三日だけなのに、体操を休んだのは、たった三日だけなのに、ラジオカセを囲んで、安田さんやきんちゃんたちと体操した日が、結子にはなつかしく思われた。窓の外でトラクターが低いなりを立てている。雑草が繁茂した田んぼを耕しているのだ。農閑期の間に乾いて硬くなった土が、掘り返されて真っ黒な色に変わっていく。

結子は目を見張った。ふかぶかとした土のところどころで湯気が立ちのぼっている。地中で眠っていた生き物がたち、目を覚ましたのだらうか。鼻をくっつけたり、力がわいてくるような匂いがする。

結子には、地面が呼吸を始めたかのように見えた。

床頭台しょうとうだいの出荷から一カ月が過ぎた。
ゴールデンウィークは四日間お休みが
続いたけれど、結子ゆうこも春樹はるきも外出したのは一日
だけだった。

楓かえでが子どもを連れて帰郷したので、近くの
森林公園へお弁当を持って出かけた。緑の木
陰は気持ちが良い、人も多かった。

春樹はるきも結子ゆうこも人ごみに酔ってしまい、残り
の休日は家で過ごした。春樹はるきは工場の中の片
づけに没頭した。結子ゆうこもニチニチソウやペチ
ュニアの苗を買ってきて寄せ植えをしたり、
草取りをして汗を流した。

大阪のアパートへ戻る楓かえでたちを高速バス
の乗り場まで送っていった連休最後の夜、電
話が鳴った。

「もしもし、熊野くまのですが」
こんな時間にすみません、と消えいりそう
な女性の声に、結子ゆうこは思わず背筋を伸ばした。

熊野くまのさんの奥さんだろうか、娘さんだろう
か、声が小さくて分からない。戸惑いながら、
「はい、夫に代わりましょうか？」と答える
のをさえぎるように、
「こんな時間にすみません。実は主人が救急
車で運ばれました。ICUに入っています」
――
肩が震えて落としそうになった受話器を

「えらい、すみません。お医者さまから、一応、親しい人には連絡したほうが、と言われまして。ご主人にはお世話になってますので」

結子の心臓がバクバク言っている。

「どこの病院ですか」

「市立病院です」

「わかりました。すぐに参ります」

振り返ると、春樹と目が合った。

「どうしたんだ」

「あなた、熊野さんが救急車で運ばれたんで

すつて」

夫が晩酌のビールを飲まなかったのは虫の

知らせだったのだろうか。結子は助手席に飛

び乗った。国道をまっすぐ北に走る。交差点

で停止しようとする、赤が青に変わる。交差点

に青への暗示のようになる、信号機は近づくとび

熊野さんはきつと助かる。

結子は胸の前で両手をぎゅっと組んだ。

下りていた。地下駐車場の入り口はシャッターが

「調剤薬局の横の平面駐車場は二十四時間開

いているはずだ」

春樹はハンドルを切りなおし、いったん国

道まで車を戻した。信号が青に変わってすぐ

の流れるように車がやってくる。方向指示器のきざむような音が耳につく。

ようやく車の流れが途絶え、春樹はアクセルを踏み込んだ。

車は、空中だといのに、駐車スペースは一車分
 し、空いていない。LED照明に照らされた
 結子は髪の手をぐしでとのえ、夫の後
 についで夜間出入り口へ向かった。
 床頭台を納品した日のことが結子の胸に
 浮かんだ。段ボールの注文を忘れて徹夜作
 業になつてしまったこと。ステッチャーが壊
 れて熊野さんに直しに来てもらったこと。き
 んちゃんが出す。あつと「ハンゲン、ハンゲン」
 まで思い出す。あつと「ハンゲン、ハンゲン」
 ひと月なんてあつと「ハンゲン、ハンゲン」
 そのとき、結子の胸に絹針で刺すような痛
 みが走った。
 「あな、ちよつと」
 エレベーターの手前で春樹に声をかけた。
 「熊野さんだけ、一緒に徹夜で仕事手伝つ
 てくれたじゃないか。あのときの疲れが残つて
 いたのじゃないか。あのとき、考えた」
 「僕もおなじこと、考えていたんだ」
 エレベーターの扉が音もなく開いた。
 ような光景が広がって、昼間と見まがう
 看護師はリリウムの床を走るようにし
 て、ナースコントロールの部屋に入っていく。
 銀色の光を放つ医療器具。整然と並んだステ
 ンレスのワゴン。病室からもれてくるささや
 き。救命救急室には昼夜の別はないらしい。
 結子は夫のすぐ後ろを歩きながら、バッグ
 を持ち直して、ナースセンターの横にあるIC

ガラス越しに人が立っていることに気づいた看護師がドアを小さく開く。
 「熊野くまのさんのご家族の方ですか」
 「いえ、家族ではないのですが、親しくさせてもらっているのだから奥さんから連絡をもらったのです」
 看護師は二人の顔を交互に見つめ、「お待ちくださいね」と言いながらベッドを振り返った。小柄な女性が立ち上がって会釈している。
 「ここで手を消毒して、エプロンとマスクを着けてお入りください」
 そのとき結子ゆうこは、熊野くまのさんの奥さんに会うのは初めてであることに気づいた。
 小柄で年は七十前ぐらいたろうか。髪をひつつめにしている。紺の着物でも着たら似合いそうな感じがする。
 「くすのきです、熊野くまの社長にはいつもたいへんお世話になってるのですね。まさか、こんなこともなるなんて。機械の調子が悪くて見に来てもらった。あのときの徹夜仕事を助けて見たら、ほんとうに申し訳ない」
 春樹はるきの後ろで結子ゆうこも頭を下げた。
 「いいえ、主人は高血圧の持病がありますから、そうだったのですか」
 「血圧が高いことなど聞いたことがなかったのだから驚いた。」
 「だから気になさらないでください。それより、どうぞ」
 奥さんはベッドのそばで熊野くまのさんに声をかけた。
 「あなた、くすのき、の社長さんですよ。奥さまも来てくださって。起きて、目をす」

開けて「耳元で、「く、す、の、き」とはつきり言ったのが通じたのか、熊野さんはまぶたを開いた。春樹の顔を見つめ、首を縦に振った。ありがとう、と言いたそうだ。「おやつさん、元気出してくださいよ」かがんで熊野さんの顔をのぞきこんでいた春樹がはっというような顔をした。

ベッドの横に床頭台が置いてある。薄茶色が、木目調のベッドとアイボリーの壁にしっくり合っている。

「熊野さん、点滴始めますよ」

看護師がドアを開けて入ってきた。床頭台の天板をくりと回し、薬液の入った袋を置いた。じっと見ていた春樹は天板がきしむことなく回ったことにほっとしたようだ。結子もふうつと息を吐いた。

看護師は床頭台の扉の奥から、ティッシュを取り出した。そして取っ手に軽くふれて閉めた。扉は、注目されていることなど一向に気にしない様子で、静かに音も無く閉まった。昔の病院はスチールばかりで寒々していたけれど、最近では木製が増えましたね。あたたかみがあつていいですね」

熊野さんの奥さんがつぶやくように言った。結子は心遣いがうれしかった。

「熊野さんよかったですね。当直の先生が専

門医だつたから。手当てが早かつたから、回復も見の間ですよ、きつと」

看護師さんは熊野さんに言い聞かせた後、腕時計で薬液の落ちる速度を何度も確認してから部屋を出て行った。

結子はかがんで声をかけた。

「社長さん、ゆっくり養生して、また顔を出してくださいね」

熊野さんはかすかに頷き、そして手のひらを結子に向けた。血管の浮き出た腕は細く、指の関節だけが太い。レントゲン写真で見ると骨格そのもののような手だ。

結子は、その手を握った。乾いた冷たい手は同化するように温もっている。土色の顔は目元がくぼみ、頬はこけている。ぬくもりが広がって、肩からお腹へ、体全体へ、

思わず、熊野さんの手を両手で包み込んだ。

「患者さん、お疲れですから、ご面会のかた、そろそろ切り上げていただけますか」

看護師が血圧計を手にして部屋に入ってきた。結子は顔をあげた。病室には春樹も熊野の奥さんも残っていない。廊下で人影が揺れている。

手をそっと握り返し、結子は部屋を出た。

「社長さん、良くなつてほしいね」

駐車場に向かいながら、春樹に声をかけた。おやっさんの徹夜で機械を直してくれたのは、おやっさんの職人魂だよ。その魂で体もなおして、ステッチャーが壊れたら仕事がストップし

を見てしまおう。よって、私たちが途方に暮れているの
 丸いと気がないし、歩道に二人の足音が響く。いた。
 熊野さんは ICU で五日、個室で十日間過
 ごしたのち、大部屋に移った。個室で、ご心配
 なく、「と連絡があったので、結子はお見舞い
 に行くことにした。春を飛び越して一気には夏
 が来たようなの。春を飛び越して熱中症の夏
 記事がイラスト入りで紹介されてる。結子
 は。小花模様の半そでのブラウスを着て家を出
 た。こんにちは。大部屋に移れてよかったです
 ね。病室のドアを開けると、ふんと木の香りが
 と、部屋のなかをゆつくり見渡した。四台のベ
 ックの横にそれぞれ床頭台が並んでいる。
 「あたりがとうございませぬ。森の中で寝てい
 るみたいで快適ですよ。新聞も本もゆつくり読
 めるし。」
 熊野さんは目を和ませて言った。床頭台の
 スライドテーブルは、書き置いたんだ。新
 聞と木工機軸の取扱説明書が置いてある。仕
 方が無いんですね。会社に気がな
 方。結子が笑いかけた。「お客さんに売った機
 械の調子が会社でなくなる、お客さんに売った機
 械が会社でなくなる、お客さんに売った機

「そうです。機械を売るときは試運転して
 外問が起るものは、最小限に押しさえなければ
 だらないで、外は、なんだから」
 「想定外：です。プロなんだから」
 「机の上の知識なんて、聞いて触ったことない
 くらい。実際に自分で見て、どね、奥さん。知
 分があるのとばかりだ。では、やはり違う。そ
 な気がくります。寝ていられますね」
 「熊野さんは苦笑しながら、床頭台の下にあ
 る冷蔵庫から缶コーヒーを取り出した。か
 「聞くすのきさんは創業何年になるのですか」
 「聞かれて結子は遠くを見るような目をしな
 がら答えた。「五十六年です。ね」
 「結子は受け取った缶コーヒーを両方の手の
 ひらで包んだ。微糖と書かれた缶の横にひげ
 をはやした男の顔が印刷されている。お義父さん
 ！――あごの辺りが亡くなったお義父さん
 に似ているわ。」
 結子の頭に工場の片隅に置いてあるろく
 ろの機械が浮かんだ。ちょうど足踏みシン
 ぐらの大きなハンドルがついている。丸い車輪、左
 側に木のハンドルがついている。初めて買っ
 た機械だと聞いていた。とき、初めて買っ
 た機械だ。春樹がしみじみと言ったことがある。
 「以前、春樹がしみじみと言ったことがある。
 僕を大きく、ろくろのおかげだ。大学に
 行けたのも、ろくろのおかげだ。大学に」

熊野さんは窓へ目を移した。

「戦後になつて、僕は木工機械を手がけたので、家を平和になつて、家具を作つたりする。その道具や機械に携わろうと考へたのです。」

「僕には子どもがいりません。会社は一代きり終わりです。息子さんがあるんですよ。大学生だったか？」

「浮かんた。後継者がいる、という事は、何よりです。県内でも廃業する木工所は多いですよ。後継者がいないか？」

「自営業はきついですから。」

「結子は顔を上げて言った。自分だけにね、そのおりで。こんな苦勞は、自分だけで沢山。そんなふうで考えるのでしょ。」

「荒れた指先を見つめる結子に、熊野さんは続けた。奥さん、お宅のご主人は先代の社長の働く姿を見て育つたんじゃないですか。」

「言われて結子は気づいた。」

「態度や表情は、お義父さんに向けたものなんだわ。」

「結子は缶コーヒーを飲み干した。ぬるくなつたコーヒーは甘さがぐっと増している。」

「それにしても僕が手伝った床頭台を、こんな早く自分で使うようになるなんて」

「まさか、ですかね」

「ほんとう、まさかです。こうしてみると、色合いも部屋によく合ってますね。濃い色だと部屋が暗くなるし、薄いと汚れが目立つし」

「そうなんです、社長さん。磐田部長から何度も色のチェックが入ってうんざりだったんですけど、甲斐がありました」

「磐田部長も辛抱が要ったと思いますよ。上からは徹底指導を命じられ、外注先からは鬱陶しく思われるのですから」

コーヒーの空き缶に目を落としたまま、

「結子は熊野さんの言葉を聞いていた。あのときのバタバタが、いぶん昔のことのように感じます。社長さん、ゆつくり養生してくださいませ」

「また会いにきます」

「そうやって結子は病室を後にした。」

7

その日は朝から雨が降っていた。小指の先ほどのあるかと思われ、雨粒は一面が墨色にフアルトを叩きつけて、あたり一面が墨色に塗り替わってしまっった。午後になっった。雨は細くなっったのだが、いつこうに止む気配はなかつた。

久しぶりに夕方五時に仕事を終えた結子は、久しぶりに夕方五時に仕事を終えた結子は、はちキンカレーを作ろうと準備を始めた。

春樹は口がひりつとするような辛口のカレーが大好きだ。

包丁のみねでつぶした大蒜と千切りのしょうがをフライパンで軽く炒める。香りが立つたところ、鶏肉を加える。木しゃもじで押し付けるようにして炒めていると、携帯が鳴った。

安田さんだ。

「奥さん、ちよつと聞いたんやけど」
「外から電話をかけているらしく、音楽がにぎやかだ。」

「仕事の帰りにスーパーに寄ったら熊野の奥さんに会ったんよ」

「社長さん、亡くなったんやて」

「奥さん、聞こえてる？」

「聞こえてる」

結子の声がふるえた。

「奥さん、声が小さくて聞き取れんわ。熊野の社長さん、亡くなったんや。かわいそうになあ」

安田さんは途中から涙声になった。

「いつ？」

「二週間ぐらい前のことらしいで」

お葬式を済ませたらしい。身内だけで

フライパンの上で鶏肉がちりちり音を立てている。にんにくとしょうがは焦げ付いたようなにおいがしている。

結子は火を止めて床に座り込んだ。

雨が音もなく降っている。

工場のスレートも乳色のシャツターも薄い闇の中に沈んでしまった。流しを照らす二

わ「力の
つあにに春
たら熱伝樹
のっ中票の
？、しが声
「もてたに
ういま結
こたっ子
んのては顔
なだいたを
時つたの上
間。で、げ
あ、パ。月
たソコンが
は仕事の近
事終入

「結子、もう七時だよ。晩メシは」

8

色は結子も春樹の横に進み、鈴を鳴らした。音が
が聞こえていき、遠くまで流れてゆく。薄まりな
仏壇の前に進んだ。春樹が鈴を鳴らした。
音は、はるか昔の響いた。そして、薄まりな
色は結子も春樹の横に進み、鈴を鳴らした。音が

もにさいの縞つく「るい
今忘。イよ内機。のべ奥てす私仕時翌
にれウン。部械。ネーさいたきのど事間日、
もなエスすがから調。タユは気さには付きたは
話いでにかふ聞子。はを律業を見す。居な夜にど、
かく機ねんとてう儀に。白のて。息子のすか。ま
けだ械。と。違。つ。音。を。確。始。動。笑。ん。で。い。細。
て。さ。油。を。木。屑。や。埃。こ。え。か。め。の。ワ。言。つ。た。の。よ。う。に。思。
き。い。そ。う。だ。せ。は。溜。め。た。ら。異。常。の。さ。械。い。
さ。い。の。縞。つく。る。い。私。仕。時。翌。日。結。子。は。春。樹。と。お。悔。や。み。に。行。つ。た。早。
に。れ。ウ。ン。部。械。の。ベ。奥。て。す。私。仕。時。間。日。結。子。は。春。樹。と。お。悔。や。み。に。行。つ。た。早。
も。な。エ。ス。が。か。ら。調。子。は。を。律。業。見。す。居。な。夜。に。ど。な。つ。て。行。つ。た。早。
話。い。で。か。ふ。聞。子。は。を。律。業。見。す。居。な。夜。に。ど。な。つ。て。行。つ。た。早。
か。く。機。ね。と。て。う。儀。に。白。の。て。息。子。の。す。か。ま。の。よ。う。に。思。
け。だ。械。と。違。つ。音。を。確。始。動。笑。ん。で。い。細。
て。さ。油。を。木。屑。や。埃。こ。え。か。め。の。ワ。言。つ。た。の。よ。う。に。思。
き。い。そ。う。だ。せ。は。溜。め。た。ら。異。常。の。さ。械。い。

い十光ワを落との蛍光燈が、使いかけのまな板に鈍

森山商事から床頭台の新しい注文が来て、

春樹も朝からずっとデスクにかじりついていて。今日は切り上げるよ。目も疲れたし」

春樹の充血した目を見て結子は立ち上がった。

「私、急いで買い物に行ってくるわ。ご飯はタイマーで仕掛けてあるし、外食は面倒だものね」

僕も行く、と春樹は車を運転してくれた。最近二十四時間営業のスーパーマーケットが近くにオープンした。四車線の国道を車はすべるように走っていく。

「床頭台の注文が来てよかったわね」

結子は春樹に声をかけた。

「市立病院のとき苦労した甲斐があったよ。

磐田部長には世話になった」

「ほんと、そうね」

結子は心からうなずいた。

「今度はどんなデザインなの？」

「納品先が小児科だから、子どもが使いやすい親しみのもてるデザインを考えているんだ。扉や引き出しの色を、女の子がピンク、男の子はブルーに色分けしたらどうだろうか。いいアイデアだね。病室も明るい雰囲気になるわ」

「扉の横に小さなホワイトボードをつけようか。退屈したら絵を描いて遊べるだろ」

夢中になって話す春樹の横顔をそつと見た。髪の毛がずいぶん白くなり、頭頂部も薄くなっている。

ね せ を め ま に 結 子 は 通 り が かつ た 鮮 魚 売 り 場 で 足 を 止
 い 包 を 客 見 た 結 子 は 通 り が かつ た 鮮 魚 売 り 場 で 足 を 止
 に 丁 着 頼 め た 結 子 は 通 り が かつ た 鮮 魚 売 り 場 で 足 を 止
 洗 頭 を 買 った 結 子 は 通 り が かつ た 鮮 魚 売 り 場 で 足 を 止
 、 落 と した 結 子 は 通 り が かつ た 鮮 魚 売 り 場 で 足 を 止
 今 度 は 切 り 口 から 尾 の ほう へ
 苦 悶 々 と 過 ぎ じ ゃ な い か
 私 、 今 日 に 架 け る 橋
 を 上 げ た
 春 樹 が う れ し そ う な 声 で 言 い 、 ポ リ ュ ー ム
 フ ー ナ ン ク ル じ ゃ な い か
 信 号 が 赤 に 変 わ り 、 結 子 は カ ー ラ ジ オ の ス
 っ パ ー | 国 道 は 四 車 線 に 広 が っ て 、 昔 ど お り と 思
 っ て い た 。 だ も 、 そ ん な こ と は な い だ わ 。 思
 信 号 が 赤 に 変 わ り 、 結 子 は カ ー ラ ジ オ の ス
 イ ッ チ を 入 れ た 。 男 性 デ ュ オ の 透 き と お る よ
 う な ハ ー モ ニ ー が 流 れ て い る 。 サ イ モ ン と ガ ー
 フ ー ナ ン ク ル じ ゃ な い か
 の 間 に 薄 れ て 出 来 な い と 思 っ て い た の に 、 浮
 け 出 す こ と は 出 来 な い と 思 っ て い た の に 、 浮
 二 の 腕 や 、 糊 の 効 いた セ ー ラ ー は み 出 た 違 だ 。
 結 子 は 足 で 拍 子 を 取 り な が ら ハ ミ ン グ し た 。
 激 流 に 架 かる 橋 の よ う に 、 君 の 心 の 支 え に
 な っ て あ げ る よ 。 ラ ジ オ か ら 流 れ て いた 曲
 も 信 号 が 青 に な り っ た 。 余 韻 を い つ く し む よ う 曲
 に 、 結 子 は ハ ミ ン グ を 繰 り 返 し た 。

向けて包丁を入れる。背骨から上半分をさば
 いたあと、尾の方から中骨に沿って包丁を入
 れる。店員は坊主頭をかしげて真剣そのものだ。
 結子は一樹を思い出していた。
 忙しい名古屋は都会だからお客さんも多く
 いら。ボイルやりいか百円引きだって」
 パックをかごに入れながら、春樹の目は冷
 蔵ケースを見渡している。
 「刺身ももうまそうだ」
 一樹のことなど頭にないらしく、今度はお
 刺身四点セットを手にとった。惣菜コ
 ーよほどお腹が空いているのだろう、惣菜コ
 ナーでは、山菜のてんぷら盛り合わせにも
 手を伸ばそうとする。残っているわよ」
 「夕べのてんぷらが残っているわよ」
 結子は小声で断った。
 お家に帰ると炊き上がったばかりのご飯の
 においが玄関まで流れ、たりいた。カの酢味噌
 一、生中二本で千円、やイカの酢味噌和えが
 六、百円、刺身定食千二百円、付いて、さし
 百、円、デザートにコヒー、家で食べて、さし
 ず、め、四千五百円、てここかな。家で食べたら得
 やな」
 春樹は上機嫌だ。
 結子は微笑んだ。
 「お義父さんにそっくり。
 義父もお酒が好きだった。隣町の縄のれん
 でお酒を飲むと、結子は車で迎えに行った。

助手席に座り、そろばんをはじく真似をする。
 「焼き鳥二本に、お銚子一本、ビール一杯、
 枝豆ひと皿に奴豆腐。しめて千四百七十円か。
 飲み屋の親父、算用まちごうとるわ。枝豆の
 代金忘れとる。百五十円の得やな」
 「得やなで終わるところが一緒だわ。
 一樹も同じようなことを言うようになるのか
 しら。」

結子は春樹のコップにビールを注いだ。

その夜、お風呂上がりになり、一樹から電話が
 かかった。
 「母さん。俺だけ」
 「受話器から、はずんだ声が聞こえる。
 「元気なの？」

結子は話しながら、濡れた髪をタオルでく
 るんだ。
 「俺、最近ウナギ焼いているんだ」

「えっ、ウナギ？」

「そう、愛知県一色産のウナギ。今日バイト
 に行ったら、店長が俺に焼けていうんだ。
 店の正社員より上手いんだぜ」

「ほんと。がんばっているね。一色産、おい

「いだろうね」
 「たぶんな。食ったことないけど」

結子は、くすつと笑った。

「用事もないのに電話をかけてくるな
 んて。ウナギの焼き方をほめられて、よほど
 嬉しかったんだわ。」
 「母さん、店長に言われたんだ。卒業したら
 このまま就職しないかって」

結子は壁を見つめた。洗い髪から滴がした

たりパジャマの肩を浸潤^{しんじゆん}する。
 「もちろん、俺、ことわったけどな」
 「かずきはあっさり言った。
 「そうなの。よかつた」
 思いがけない言葉が口から飛び出した。
 結^{ゆう}子^こはベランダに出た。両手をあげて大き
 く伸びをする。
 田んぼを渡る。風が心地よい。
 踏切の警報機が点滅して、音が鳴り始めた。
 琴平のきの最終電車だ。は、ほどよい疲れ
 明かまりのついた二両編成は、ほどよい疲れ
 をにじませながら通り過ぎていった。
 。（了）